

日本に於ける義犬塚傳説に就きて

文學士 高 木 敏 雄

日本の義犬傳説或は義犬塚傳説と云ふものに就いて一寸大體のことをお話致します。義犬傳説と申しますと、讀んで字の通り、忠義な犬に就いての話でありますが、併し唯々話と云ふばかりではなくして、其話に一定の形式があつて、比較研究の學問の方から何か意味があるやうなものを傳説と申しますので、單に犬に關した話と云ふだけではございませぬ。犬と云ふものは昔から家畜として至つて主人に忠實なる性質のものでありまして、隨て犬の忠義に關した話が世界に隨分澤山ございます。其話の中で、私其の學問の方から申して假に義犬傳説と名づける様なものでございまして、其義犬傳説と云ふものゝ中で死んだ犬に對して墓を造つて跡を記念したと云ふやうな話を義犬塚傳説と申します。

義犬塚傳説と云ふ中にも大體三つの種類が區別される譯でございます。假に名を付けて見ましたが、第一種は教訓的義犬傳説と名づけました。是れは家畜の犬でさへ此位忠義である。況や人間は萬物の靈であるから犬に劣つてはいけないと云ふ風な意味が含んで居りますので、特に教訓の意味が強いと云ふ處から之れを教訓的義犬傳説と致しました。第二は童話的義犬傳説と名づけまして。童話と云ふ以上は

無論教訓を離れては居りませぬが、教訓と云ふ方は大分奥に潜んで居つて、話其ものに頭から教訓と云ふことか見えない。教訓と云ふことを別にしても其話には話として一つの形もあれば意味も具はつて居る、さうしてそれを聴く内に自から教訓になると云ふ様な性質のものであります。それを童話的義犬傳説と申します。第三種は英雄譚的義犬傳説といふ名を附けました。人間の場合で申せば、或英雄があつて偉大なる事業をする、或は化物を退治して人の難を救ふやうな事を致します。その英雄と同じ様な性質を犬が具へて居るといふ點から之れを英雄譚的義犬傳説と云ふのであります。此三つの外には一寸ないのであります。

(一) 教訓的義犬傳説 日本で一番早く書物に出て居るのは日本書記の崇峻天皇の二年七月(用明)の條にあります。其の内容を簡単に申しますと、物部守屋の家臣に捕鳥部萬と云ふものがありました、守屋が滅びた後にこの萬が多分謀叛をするだらうと云ふやうなことで、朝廷から萬の征伐の命令が下つた。其時萬が山に隠れて逃廻つたけれども、向ふは大勢自分は一人で到底敵はぬと見て、自ら弓を折り劍を折つて死んでしまつた。其時に萬の死骸を八段に斬つて八つの國に分けて晒したと云ふことであります。所が豫て萬の飼つて居つた白犬がありました、其白犬が萬の屍を夜晝眺めて吠へてゐたが、とう／＼仕舞には屍を盗み取つて、塚の中に持つて行つて匿して、自分も番をしながら死んで了つた。河内國の國司が、大變珍しい話であると云ふので之れを朝廷に奏聞致しますると、朝廷では、それは感心なことで

ある、後世の手本であると云ふので、萬の死骸と犬を萬の親類に賜はつて墓を造つたと云ふことになつて居ります。其墓は和泉志と云ふ書物に依りますと、河内國八田村と云ふ處に在つて、犬の墓は其北に並んで居ると云ふことであります。是れが日本で最も早く文獻に見えた義犬の塚であります。

それから同じ日本書紀（前の話の續きで二三行位）に似たことが出て居ります。戰爭で死んだ者の中に櫻井田部連膽淳と云ふ者がありまして、其死骸を犬が守つて居つて、親戚の者が來て葬るまで其處を離れなかつたと云ふことであります。是れには墓の事は出て居りませぬ。此やうな話が事實であつたかはいかは別問題であります。支那の方には是れと能く似た話があるのであります。搜神記（陶淵明の作）の卷二十に矢張り犬の墓の事が出て居ります。それは李信純と云ふ人が居つて家に一匹の犬を養つてある。名は黒龍と云つて居る。或時城外に於て酒を飲んで、大變酔つて、家に歸る途中で草原に眠て居つた。丁度其時大守が獵をして、此草の中に何か居るだらうと云ふので火をつけて焼いた。然るに其人は眠つてゐても何うしても目を覺まさない。側に居る犬が大變心配して、着物を引張つたり何かしたけれどもなかなか目を覺まさない。そこで犬は近邊にある水の中へ飛込んで自分の毛に水を含まして來て其水で主人の眠て居る周圍の草を濡ふして辛うじて主人を救つた。さうして自分は其爲めに疲れて死んだ。大守が之れを聞いて非常に感心して犬の恩を報ずること人より甚し、豈犬に如かんやと云つて、其犬に人間と同じ様な棺槨を與へて葬つた、今紀南と云ふ處に義犬の墓があると云ふことが出て居ります。

それから同く搜神記の同じ卷で、今の話のすぐ次の節に亦忠犬の話が出て居ります。是れは墓はございませぬが、第二の種類の童話的義犬傳説に近い處があるから一寸申して置きます。吳の華龍と云ふ人が一匹の強い犬を飼つて居つた。或時其犬を連れて川邊へ行つて萩を切つてゐた所が大蛇に捉はれた。さうして犬が奮闘して蛇を殺して主人を救つたと云ふ話があります。

以上第一種の教訓的義犬傳説と云ふのは、犬が忠義であつて墓を造つたと云ふだけで別に奇抜な點はありませぬけれども、以上の點で義犬塚傳説に這入る譯であります。

(二)童話的義犬傳説 此方で一番古い處は今昔物語でございます。あれは今より八百年程前に出來たのであらうと云ふことで、話を集めたものゝ中では日本で一番大きいのみならず、世界全體から云つても指を屈する位に有名なものであります。其今昔物語(卷二十九の三十二)陸奥國狗山の犬が大蛇を昨殺した話があります。狗山と云ふのは、犬を連れて獵することを狗山と云ふと後に書いてあります。或人が山へ行て、日が暮れて、大木の洞に這入て眠つて居る。其大木に蛇が棲んで居る。これは日本許りでなく、大木に蛇が棲むと云ふとは印度でも昔から澤山あるとでございますが、大木から蛇が下つて主人を食はうとした。其時に犬が頻に吠へて危険を告げる。主人は目を覺まして幾ら叱つても止まない。變に思つて、屹度是れは自分を食ふつもりであらうと考へて、非常に怒つて犬を殺さうとした處へ、上から蛇が落ちて來て殺さないで濟んだと云ふことになつて居ります。是れは短氣を起こしてはいかぬと云ふ意

味を云つてあるのでありますが、其話がもう一步進むと、犬を殺して了つたと云ふことになりす。外のは凡て誤つて犬を殺して了つたと云ふことになつて居りますのに今昔物語の方では犬が助かつて居る、また墓もございませぬ。併し其外の話で必ず犬が殺されて了ひ、又墓も造られて居るところから考へて見ると、今昔物語の話が少し抜けて居る處があるだらうと思はれます。

それから今昔の次には鎌倉時代に出來ました三國傳記と云ふ本であります。之れも矢張り今昔の系統を引いたものでありまして、澤山の話を擧げてございます。三國傳記と云ふのは日本・支那、印度といふ此三國の話を変える／＼話してあるから出來た名前であります。其三國傳記（二卷の十八）の話が純粹なる童話的義犬傳説の形式を完全に具へて居ります。其内容を申しますと、表題は不知也河狩人事として、それから「昔江州の不知也河の邊に狩人があつて、出ては山の鹿を殺し、菩提を求むる事なし、入ては家の犬を飼ひて煩惱を不厭……或時林の中に獸を射んとするに日已に暮れぬ、弓に雁俣添へて大なる朽木の本に立寄つて夜を明さんとする處に、小白丸と云ふ狗をつなぎりけるが、及深更、此犬主に向つて頻りに吠ゆ……腹を立て、犬の頸を打落しければ、其頭飛上つて朽木の上より大地に下りて……呑まんとする喉に嚙付て大蛇を喰ひ殺せり、狩人は驚怖悲泣せり、其處に祠を立て、神と崇む、今の犬神明也」とあります。さうして今の近江國の犬上郡と云ふ名は其れから來て居ると説明してあります。是れが日本の文獻に見えた純粹な完全な義犬傳説の例であります。何から來て居るかと申し

ますと、多分是れは印度から來て居るのだらうと思ひます。

先づ日本の方から申しますと、此話が後に馬琴の弓張月の中にあります。馬琴と云ふ人は博識であつて、何か面白い話があると必ず自分の小説に作り込む癖がありました。此話も必ず馬琴の小説の中になければならぬと思つて探して見ると、果して弓張月の首卷に是れと全く同じ様なことを作つて居ります。又此話が日本に弘まつて居るといふ證據には、是れが地方の傳説の様になつて了ひまして、三河國にも其例がございます。即ち鹽尻と云ふ隨筆の中に二ヶ處出て居ります。鹽尻と云ふ本は何う云ふ譯だか同じ事を何度も書く癖がありました。其五十九の卷と二十八の卷に殆ど一字一句も違はないことが書いてあります。

其事を申しますと、下和田村に尾犬頭神と云ふのがあり、上和田村に首犬頭神と云ふのがある。其傳説に依れば、昔和田某なる者が晝寢をした時に、其近處の池に居る大蛇が吞まうとして出て來た。さうして手飼の犬が其蛇を防がうとして暴れまはつてゐた處が、和田氏が目を覺まして、此犬は自分を食はうとするのであらうと考へて、遂に犬を斬殺して了つた。あとで事情が分つて大に後悔して其犬を祀つた。即ち其犬の尾と首を祀つたのが今の尾犬頭神と首犬頭神であると云つてあります。鹽尻の著者は斯う云ふことは方々にあると云つて居ります。三河雀(卷二)にも矢張り是れと全く同じことが書いてあります。尙似たことは澤山にありませうが、一例を申しますると、伊勢國の安濃郡長野村大字平木小字

犬塚茶屋と云ふ處に犬の塚がある。是犬に就いても其話の内容は少しも違ひませぬ。或夜犬を連れて其處を通つたときに非常に其犬が主人に向つて吠える。主人が怪んで、此犬は屹度自分を食はうとするのであらうと思つて腰の刀を抜いて犬の首を斬つて了つた。處が犬の首が數丁飛んで大蛇の頭に噛付いて之れを殺した。此の感心な犬を埋葬して塚を作つた。其れが義犬であると云ふことになつて居ります。

次に斯う云ふ話は獨り日本だけにあるのぢやない、世界全體に傳はつて居ると云ふことを申し上げます。英吉利では昔から忠犬ゲレルト (Geller) と云ふ話があります。ゲレルトと云ふ犬が忠義を盡した大變有名な話であります。ツエールスのレウエリン (Llewellyn) と云ふ王様が一匹の犬を飼つて居つた。さうして其犬が王様の赤兒と仲が好かつた。或時王様の留守に其犬が赤兒の番をして居た。さうして王様が歸つて來て見ると赤兒が見えない、犬の口には大變に血が付いて居つた。是れは屹度自分の留守に赤兒を食つたのであらうと考へて、王様は其犬を殺してしまつた。所が、あとで調べて見ると然うではない。自分の赤兒は健全であつて、其側に大きな狼が死んで居つた。是は狼が來て赤兒を食はうとしたので犬が闘つて其の狼を殺した。それを王様が誤解して無慘にも犬を殺して了つたのである。それから非常に残念がつて犬の墓を造つてやつた。是れが所謂ゲレルトと云ふ犬の墓であると云ふ話であります。是れと全く似たやうな話が露西亞其外方々にありますが、其話の源は中世紀に於て非常に讀まれたラテン語の本があります。それは *Gesta Romanorum* (ローマ人の事業) と云ふ名であります。作者は判

然致しませぬが、多分十四世紀頃に出來た本であらうと思ひます。諸方面から出た話を雜駁に集めてありますが、其中に矢張り同じ話が出て居ります。それは相手が狼ではありませぬ。相手が蛇でありまして、蛇が或武士の一人子を食はうとしたのを、犬が之れと闘つて遂に殺した。然るに主人が歸つて來て、犬の口に付いて居る血を見て、是れは犬が自分の子を食べたのであらうと誤解して之れを殺して了つたと云ふのであります。此中世紀の話が今日の歐羅巴全體に傳はつて居る所の義犬塚の源でありますが、又遡つて考へますと、其源は希臘にあり、希臘の話の源は更にまた東方にありましてアラビア、ヘブリウ、波斯、更に進んで印度と云ふやうに段々尋ねることができるのであります。印度の方で申しますと、御承知の法苑珠林——法苑珠林と云ふのは一切經を簡單にした百科全書風のものであります。西曆七世紀の半少し過ぎに出來た本でありまして、唐の沙門道世の編纂したものでありますが、其中に僧祇律と云ふお經の本から引いたお話がございます。西洋人は一切經は大部であるから知りませぬけれども、法苑珠林は夙くから知つて居つた。其法苑珠林の話を一寸御紹介致しますと斯う出て居ります。

佛告諸比丘、過去世時有娑羅門、家貧、有婦不生兒、家有那俱羅蟲、便生一子、時婆羅門以無子故養如兒想、那俱羅子於婆羅門亦如父想、於後婦便有身、滿月生子、便作是念、由那俱羅生吉祥子、使我有兒、時婆羅門欲出乞食、便勅婦曰、汝若出行當將兒去、慎莫留後、婦與兒食、已、便至比舍、借確春穀、是時小兒有酥酪香、時有毒蛇、乘香來至、張口吐毒、欲殺小兒、

那俱羅蟲便作_二是念_一、我父出行母亦不_レ在、云何毒蛇欲_レ殺_二我弟_一、便殺_二毒蛇_一、段爲_二七分_一、父母知者必當_レ賞_レ我、以_レ血塗_レ口當_レ門住、欲_レ令_二父母見_レ之歡喜_一、時婆羅門始從_レ外來、見_二婦舍外_一、便喚_レ恚言、我教_二行時當_レ將_レ兒去_一、何以獨行、父欲_レ入_レ門見_二那俱羅口中_レ有_レ血、便作_二是念_一、我夫婦不_レ在、無_レ殺_二食我兒_一、徒養_二此蟲_一、卽前打殺、既入_レ門內、見_二已兒_一、指而戲、復見_二毒蛇七分_一在、時婆羅門自苦責、是那俱羅善有_二人情_一、救_二我子命_一、我不_二善觀_一、卒便殺_レ之、可_レ痛可_レ憐、迷悶_レ地云々、

此話には墓のことはございませぬが、矢張り犬の忠義を誤解して殺したと云ふのであります。而して此話がパンチャタントラム(Panchatantram)と云ふ本の中に出て居ります。其方では一寸變はつてゐて、女房の方が水を汲みに行つて、亭主の方が留守をしてゐて、留守をしてゐながら乞食に出て了ふのであります。さうして女房が水を汲んで歸つて來て見ると、那俱羅が口に血をつけて門の處に居たので、水瓶を叩きつけて殺したと云ふのであります。この那俱羅蟲と云ふのは西洋語の Ichneumon で、多分是れはよく蛇を食ふマングース(Mangos)のことであらうと思ひます。兎に角相手は蛇であつて、赤兒を救ふものは、犬或は猫ねこみたやうなものであります。一體 Panchatantram の方が或は法苑珠林より新しいかも知れませぬ。此本は何時出來たかと云ふことは分りませぬけれども、兎に角西暦の六世紀には確に有つたのであります。其時分の波斯のコースル・アヌシルワンと云ふ王様の令に依つてこの本波斯語に譯されて、而して波斯からして段々西の方に傳はつたものであります。つまり此第二種の童話的義犬傳説は、

人間の飼つてゐる家畜が忠義を盡して、人間の方が誤解して其れを殺すと云ふことが話の肝腎な筋でございまして、此話は印度から西藏、西藏から蒙古に傳へられて、其忠義を盡す者は、或場合には猫もありませんけれども、話の大體の節は一定して居るのであります。

(三)英雄譚的義犬傳説 徳川時代の末頃であらうと思ひますが「雛の字計木」と云ふ本があります。上下二卷あつて、二三十枚位の薄いものであります。當時の極く有名な昔話を集めてありますが、面白いことには、其中に話が六つあるのです。普通今日の人が日本の五大お伽話として居りますのは、御承知の通り、桃太郎、からく山、舌切雀、猿蟹合戦、花咲爺の五つでありますが、此本には其外に竹筥太郎と云ふ話があります。是れが一寸變はつて居りますが、其當時餘程有名であつたらうと思ひます。話の筋は、昔或處に百姓の庄平と云ふ者があつて一匹の犬を飼つて居つた。犬の名を竹筥太郎といふ。或時其村の庄屋の娘が鎮守の森に人身御供に上げられたが、丁度其時に座頭の去市と云ふ者が社に泊まつて、さうして夜中に變な化物が大勢集まつて喧いで居るのを見た。其時化物が歌を歌つて、竹筥太郎が怖い／＼と言つた。翌日村へ行つて竹筥太郎と云ふのは何であらう云つて聞いた所が、それは百姓の庄平の犬であると云ふ。それから其犬を借りて庄屋の娘の代りに神に供へて、とう／＼其鎮守の森の化物を退治すると云ふのであります。斯う云ふ話は日本中何處へ行つてもあるのであります。今ではお伽話になつて居りますけれども、其元は立派な傳説から出て居ると云ふことが分ります。竹筥太郎と云ふ

名前はヘイ太郎でありまして、其ヘイと云ふのは早太郎のハヤを訛つてヘイと云つたので、ハイル（這入る）をヘイルと云ふやうな具合であります。信濃國伊那郡に光前寺と云ふ寺があつて、其寺に早太郎碑と云ふ石が建つて居る。それが有名な義犬塚であります。其話は、昔駒ヶ嶽（寺から二里許りある）の山犬が其寺の椽の下で子を産んで、其子を一匹和尚に呉れて行つた。それが大變早いので早太郎といふ名を附けて居つた。其事を今日あの邊の百姓がハヤボウ／＼：：：ヘーボウ／＼ト云つて居る。それから信濃國の伏見と云ふ處で矢張り庄屋の娘が鎮守の人身御供に上げられる。其時に六部が來て、自分が代はらうと云ふので、箱に這入つて社に行つた所が、矢張り怪物が出て來て踊る。其踊る歌が餘程滑稽な歌で、「このことばかりは信州信濃の光前寺、ヘイボウ太郎に知らして呉れるな」と斯う云ふのです。それで一ヶ年掛つてヘイボウ太郎と云ふのを搜がした處が、それは人間ではない、あの寺の犬であると云ふので、その犬を借りて來て翌年の祭には神に供へて其神を退治した。退治して見たら恐ろしい狒々であつたと云ふことであります。此話は方々にありまして、私の國の肥後の玉名郡にもございますし、また遠江國邊りにも傳はつて居ります。

それが人身御供と云ふことの這入つて居る義犬傳説でございまして、是れは其出處がはつきり分るのであります。日本で一番古い處は、御承知の古事記にある素戔嗚尊が八岐大蛇を退治した事でございませう。あれでは豪族の娘が怖ろしい蛇に見込まれて、英雄の素戔嗚尊が計ごとを以て其大蛇を退治して娘と

結婚すると云ふことになつて居りますが、今昔の方になつて來ると一寸話が變はつて居ります。今昔物語（卷二十六ノ七）の話では猿であります。是れは宇治拾遺にも出て居りますが、獵人が其話を聞いて、自分が代はらうと云ふので犬と一緒に箱に這入つて社に供へられた。さうして猿を殺して、後に其娘と結婚すると云ふのであります。素戔鳴尊の方には犬がなくして此方には犬が出て居る。是れは妙でありますけれども、支那の方に其元らしい話があります。前に申した搜神記（卷十九）でございしますが是れには東越閩中に庸嶺と云ふ山があつて、高さが數十丈ある。其中に大きな蛇が居つて長さが七八丈とあります。其蛇が牛や羊を食つたのでは何うしても承知しないで、必ず人に夢を興へて、未婚者とか十二三歳の者を欲しがる。所がなか／＼甘い女がないので、或時將樂縣の李誕と云ふ人の娘が、六人も女が居つても仕様がなから自分が御供に上がらうと云ふので、親の許しを得て自ら進んで參りまして、刀を持ち犬を連れて社に這入つて居つたのであります。さうして數石の米の飯と牛乳を以て蛇の穴の前に置き、蛇が牛乳の欲しい爲めに出て來る處を犬と協力して退治したと云ふのであります。この犬のある點が丁度今昔の話と能く似て居ります。尙ほ其外にも似た話が支那にはあります。例へば幽怪録と云ふ本の中の烏將軍の話なども能く似て居ります。又白猿傳にも似た話があります。けれども一番近いのは今申した搜神記の話であらうと思ひます。それから今昔の方では、同く二十六の卷で、すぐ次の第八の話であらうと思ひます。是れは坊さまであります。獵人でなくして坊さまが代はつて居る。犬も此方には犬が

ございませぬが。坊さまは其れを退治したと云ふことになつて居ります。英雄と云ふものに坊さまが代はるのは是れは佛敎の影響でありまして、其證據には、佛敎の話を多く取つてゐる鎌倉時代の私聚百因縁集と云ふ本には同じやうな話が三つ出て居ります。即ち寶明童子の話、堅陀羅國の貧女の話、善見童子の話と、此三つはみな人身御供に上げられるのでありますが、此場合に第二の堅陀羅國の貧女の話に於ては、敵は矢張り蛇でありまして、他の兩つは鬼であります。さうして此話では一生懸命に念佛を唱へて鬼を感化することになつて居る。元は英雄が蛇を退治たのであつたのが、佛敎の關係で英雄が坊さまになり。それから犬や刀を用ひないで念佛を用ひて敵を感化することになつたのであらうと思ひます。

斯う云ふ風の話が段々日本に傳はつて今日の所謂人身御供の話になつたのであらうと考へて居ります。英雄的義犬傳説と云ふ方は西洋には餘りございませぬで、特に日本にある、至つて面白い話であります。此話の趣意は、或神様に人間を供へる。それから或人が邪神を退治する、それから仕舞に結婚すると云ふのであります。それが、ズツと後世のヘイボウ太郎になりましたは、化物が歌を歌つて自分の弱點を曝露すると云ふことがある。そこが童話らしいのであります。相手の怪物が自分の弱點を曝露すると云ふことは日本の話にはありますが、西洋の話にもよくありまして、例へば或惡魔が人間と約束して、何月何日まで自分の名を言つたら救つてやらう、言はぬければ殺すと云つて置きながら、必ず何處かで自分で自分の名を漏らすのであります。自分から自分の弱點を曝露して人間に退治される。つまり向

ふは力こそ強いけれども智慧がない。人間の方は力は弱くつても智慧があるから大きな猿でも何でも退治することが出来ると云ふのが話の趣意である様であります。詳しいことを申上げると餘り長くなりま
すから大體此位の處で今晚は御免を蒙ります。

